

2024年(令和6年)

第77号

(10月4日)



発行所：立正佼成会 京都教会  
 発行責任者：渉外部長 澤村悦玄  
 編集委員長：渉外広報 植田恭司  
 〒605-0041 京都市東山区三条東町 230  
 TEL (075)762-2211 FAX (075)762-2266

### 歳祝い並びに長寿祈願

### ～百寿の会員も参拝～

歳祝い並びに長寿祈願の式典が9月15日に行われ、多くの会員が参拝しました。今回の式典は京都教会にとって初の試みでした。

9時の読経供養から始まった式典では、東教会長が導師を務め、古希から百寿までにあたる会員208名を読み上げ、歳祝いを慶ぶとともに長寿の祈願を行ないました。



読経供養後は卒寿と喜寿の会員1名ずつのミニ説法があり、これまでの人生を振り返りました。

卒寿の会員は、佼成会の信仰を持ち結婚する際に「あなたを嫁にもらうが信仰はいらない」と言われたと述懐。たくあんの切り方をはじめ、さまざまなことをお姑さんに教わってきたと、1つずつその家のしきたりを身に着けさせて頂いたと振り返りました。西大路九条にあった旧道場では諸井教会長さんから「あなたの歩き方は偉そうに見える」と厳しい指導を頂いたと、立ち振る舞い、修行のあり方を教わったと述べました。諸井教会長さんから「切れば血の出る教えだ」と教わり、佼成会のご縁を頂いて少しずつ家が整ってきてありがたかったと話されました。

喜寿の会員は自身が舞鶴で生まれ、開祖さまが舞鶴に来られた際、「この港から多くの若者が戦争に行き、帰って来られなかった」と仰っていたと述懐しました。長男に障がいが見つかった時は自分のどこが間違っていたのかと責めた時期もありましたが、青嶋教会長さんがすべてを受け入れて下さり涙があふれ出て、悪果だと思っていた長男のことが仏さまのお慈悲だったと受け取ることができ、人のために役立つことを実践しようと思ひお役に励んだと振り返りました。現在は地域のボランティア仲間に入れて頂いて活動していると紹介しました。

その後、東教会長はお言葉の中で、年5回ある節句のうち重陽(ちょうよう)の節句を古式に則りご供養させて頂いたとし読み上げた208名を振り返り、古希(70歳)27名、喜寿(77歳)72名、傘寿(80歳)45名、米寿(88歳)28名、卒寿(90歳)32名、白寿(99歳)1名、百寿(100歳)3名の方方だったと述べました。百寿3名のうち、1名が家族と共に参拝されており、東教会長から花束を渡されると法座席からは大きな拍手が贈られました。また、早朝から石清水八幡宮の「石清水祭」に参列してきたことを紹介。天皇陛下のお使いである勅使が直々に天皇陛下からのお供え物を供えに参向されるおめでたい祭典の日に長寿祈願式典が開催できたことに感謝の気持ちを述べました。

最後に佼成の庭野会長のご法話にふれながら、読経供養の際の全員の声の力強さを感じるとともに、サンガが集まってサンガを支える尊さを述べ締めくくりました。



### 京都教会ビデオレター10月号 配信中 ～東教会長発～

ビデオレター10月号が京都教会のホームページで公開されています。パスワードは各支部長にご確認下さい。<https://rkk-kyoto.jp/archive1/20241001>



左記のQRコードをスマートフォンで読んで、ご覧頂くことも出来ます。地区単位、各家庭においても視聴し、1ヶ月の修行目標とさせて頂きましょう。

令和6年、私たちは「日々感謝 にこにこ元気に出会いたい ありのままの私から」を實踐して参ります。

京都教会のホームページもご覧下さい。<https://rkk-kyoto.jp/> (右のQRコードからご覧頂けます)



## 秋季彼岸会式典 ～在家仏教の有り難さをかみしめる～

秋季彼岸会式典が9月23日に行われ、多くの会員が参集しました。式典は午前10時から、経典一卷の読経供養と東教会長のお言葉でした。

読経供養の導師は東教会長が務め、京都教会歴代教会長の戒名を読み上げました。読経中、法座席では教師資格の支部代表者が集められた6,700体の戒名を一心に読み上げました。

東教会長はお言葉の中で、読経供養の途中に法座席からご先祖さまが聖壇に上がってお供物を頂戴される様子が目に見えるようだったと振り返りながら、在家仏教の有り難さについて2つを述べました。

1つは、「自らが経典をとってお経を読めること」とし、お寺では聞いているだけになりがちだが、私たちはご供養の準備をしながら故人の好きな食べ物を思い出し、季節の旬な食べ物などをお供えする中で思いを馳せることが出来るとしました。もう1つは「私たちのご供養はご先祖への回向供養」だとし、総戒名に書いてあるように自分たちの願いを叶えるのではなく私たちの徳分がご先祖へ行き、徳が高くなったご先祖の徳が私たちにも帰ってくることで徳が回っていると述べ

ました。また、私たちもいずれは先祖になる身で、100年後、200年後でも子孫がご供養をして頂けるかは今の行いにかかっているとし、春季彼岸会でも述べた庭野開祖のブドウの譬えを披露。私たちはブドウの味しか気にしないが、農家の方は根っこにどれだけ栄養を与えているかを見られている。つまり、根っこがご先祖で今の私たちは根っこを大切にすることですと解説しました。

最後に法句経から「人間に生まること難し、やがて死すべき者の、今、命あるのは有り難し」の一節を紹介。人間として生まれてくることはどれだけ難しいか、今、生きていることがどれだけ有り難いことかと解説しながら、毎日のご供養のおわりに「素晴らしいご先祖のもとに生まれさせて頂いて、本当にありがとうございます」と言わせて頂きましようと言われました。なお式典の様子はYouTube生配信も行われ、教会に足を運ばない会員が自宅にて視聴しました。

右記QRコードを読んでパスワードを入力し視聴下さい。



## 近畿支教区平和推進会議 ～WCRP と紛争和解について学ぶ～

近畿支教区平和推進会議(担当:東 靖憲京都教会長)の第2回学習会が9月8日にオンラインで行なわれ、近畿11教会の各担当者が参加し見識を深め、京都からは渉外部副部長が出席しました。

今回は篠原祥哲氏(WCRP 日本委員会事務局長、ACRP 事務総長)が「WCRP と紛争和解」と題し、約1時間の講演を行ないました。

篠原氏はあらためてWCRP(世界宗教者平和会議)について設立の精神や過去の大会の歴史を振り返り、「異なる宗教、共通の行動」という根本部分を強調されました。1970年、京都での第1回大会は第二次世界大戦を宗教者が止められなかったことへの反省から生まれたものだとし、当時、米ソを中心に核兵器の数が増加したことやベトナム戦争、環境問題など政治だけでは解決できない諸課題に宗教者が取り組む第一歩になったと述べられました。その後、約4~7年ごとに世界各地で開催されてきた中で、WCRPの使命と役割は社会的資源と精神的資源であると解説。宗教協力から生まれる力を活用して紛争解決や平和構築、持続可能な開発を推進することだと述べました。また、世界では国の行政よりも宗教団体のほうが地域住民のことを把握しているのが現状で、それら宗教共同体を生かすことでWCRPは今や92ヶ国に属していると説明しました。続いて、WCRP日本委員会の取り組みを紹

介。韓国、中国、北朝鮮、米国のそれぞれと日本の2国間の宗教対話は政治が停滞している場合や、国交がない状態でも信頼醸成と共通行動の確認のため継続されており、北朝鮮にもWCRP国内委員会が存在することにふれ、「拉致問題」については突っ込んだ議論になったことを述べられました。

また、WCRPの4つの活動について、①国内外の宗教者同士の連携や政治指導者との連携、NGO、市民社会との連携による「ネットワーキング」、②国連、G7サミットなどへの「提言」、③環境教育、平和大学講座、和解のためのトレーナー養成などの「教育・啓発」、④難民受け入れ、災害復興などの「人道支援」など多岐にわたっていることも紹介されました。

ロシアによるウクライナ侵攻についてはWCRPとしてどのようなアプローチが出来るかを模索しながら、プーチン大統領とロシア正教との関係性に着目し、現在も平和解決に向けた宗教外交を継続中であることが報告されました。特に紛争地域の宗教者を日本に呼び東京平和円卓会議を過去2回行なう中で、「和」を重んじる日本の宗教施設見学で佼成会の「大聖堂」を訪れた際、4階ホールに職員や杉並教会の会員約1,000名が拍手で“おもてなし”されたことで紛争地域の宗教者同士の関係が徐々に変化したことが印象的だったと振り返りました。